

第84回麻布獣医学会 一般演題9

胆嚢破裂を起こした犬の1例

杉山 淳¹, 堀川 智生¹, 三品 美夏², 渡邊 俊文²¹DVMs動物二次診療センター, ²麻布大学

[はじめに]

近年、犬において胆嚢・胆道系疾患は日常診療において遭遇することが珍しくない疾患である。

今回、DVMs動物二次診療センターにて臨床症状が良好な経過を維持していたものの、実際には胆嚢破裂を起こしていた症例に遭遇したため、その概要を報告する。

[症例]

チワワ、雄、5歳齢、体重7.4 kg。

[経過]

元気・食欲低下を主訴に来院。血液検査でGPT 324 U/L, ALP > 2000 U/L, T-Bil 2.1 mg/dlと肝胆道系の異常が疑われた。また超音波検査にて胆嚢粘液嚢腫様所見が認められた。

以上より胆嚢粘液嚢腫による体調不良と診断し、静脈点滴を中心とした内科治療を開始した。

その後病状は短期間で顕著に改善し、第4病日に再度血液検査を実施したところ、GPT 134 U/L, ALP > 2000 U/L, T-bil 0.2 mg/dlとALP値以外は改善傾向にあった。

第12病日、容態は改善傾向だが、エコー画像上では明らかな胆嚢の形態的变化が認められたが胆嚢粘液嚢腫様所見には変化がなかった。

第23病日よりALPの低下(965 U/L)が認められた。

第24病日、胆嚢切除術を実施したところ、胆嚢と肝臓の癒着が認められ、胆嚢の裂開部も観察され胆嚢破裂を起こしていたことが確認された。定法通り総胆管の通過確認・胆嚢切除を行い閉腹。その後は良好な経過をたどっている。

[考察]

第1病日、血液検査結果と超音波検査で放射状に描出された内容物が充満した胆嚢を認め、胆嚢粘液嚢腫と診断した。血液検査では第8病日までは測定不能であったALPが第23病日には965 U/Lと低下していた。症例の体調及び血液検査結果から内科療法で病態が改善傾向にあると判断してしまっていたが、実際には入院中に胆嚢破裂を起こしており、ALP値の低下は、むしろそれによるものと推察された。

また、第12病日に再度超音波検査を実施した際、胆嚢の頭側が第1病日と比較し円みが無くなっており、また粘液嚢の中心と思われる部位の変位が認められた。

これは結果的には胆嚢内容物が腹腔内へ漏出し胆嚢の形状が変化したためと考えられた。胆嚢破裂は胆汁性腹膜炎を引き起こすこともある疾患であるが、本症例が重度腹膜炎を引き起こさなかった要因として、胆嚢内容物が固形物であったこと、また胆嚢内容物に感染性が無かった可能性が挙げられる。

大網が胆嚢内容物を取り囲んでいたことも幸いしたと思われる。

容態の改善・血液データの改善に惑わされ実際の病態を楽観視し、手術を検討していたにも関わらず、胆嚢が破裂してからの手術となってしまった。

胆嚢粘液嚢腫の場合、胆嚢破裂の危険性があり、必ずしも動物の状態と病態が一致するわけではないことが本症例から考えられ、胆嚢粘液嚢腫と診断されたならば早めに外科的治療を検討した方がいいと思われた。